

富山大学における入試改革と入試広報戦略

船橋 伸一 (富山大学)

入試広報に力を入れても、ありきたりな入試方式では全国から優秀な学生を集めることは困難である。そこで、アドミッションポリシーを考慮しつつ、入試科目や配点を変更するよう提案した。その結果、予備校が公表する偏差値ランキングや、実際の得点率も上昇するなど、一部の学部・学科において、入学者の学力の向上が見られた。同時に、できるだけコストをかけずに、効果的に入試広報を行うよう取り組んだ。種々の取り組みを行った結果、受験生やその父母、高校教員への直接対話が最も効果的であると判断するに至った。そして地方試験会場として、経済学部教授会に名古屋会場を、工学部教授会に首都圏会場の設置を提案し、実現した。年々これらの試験会場での受験者数は増加し、会場の定員を越えることとなった。

1. はじめに

平成 29 年度入試において、富山大学は一般入試の志願者数が過去最高となった。そして平成 30 年度入試では、この記録を更新した。その結果、平成 29 年度には全ての国公立大学およそ 170 校のうち 8 位となり、翌年には 5 位となった。

同時に入試科目や配点を変更した学部・学科において、予備校が公表する偏差値ランキングや、合格者の実際の得点率も上昇するなど、入学者の学力の向上が見られたところもあった。

これまで志願者を増やし、入学者の学力を向上させるため、高校教諭や生徒との直接対話、質を落とさず受験生の選択肢を増やす入試改革、メディアのニーズに敏感になることによるメディア利用効果の向上をはかってきた。ここでは、その具体的な内容を明らかにしたい。

2. 高校から大学への依頼

近年、大学は高校の進路指導部などから、大きく分けて 3 種類の依頼を受けることが多い。

1 つ目は生徒全員を対象とする「入試講演」であり、ここでは大学に進学することの意味や、大学の選び方などについて、幅広く話すことが求められる。一般に 1 年生全員、2 年生全員、1 年生と 2 年生を全員、PTA 総会で父母を対象といった形をとり、概して聴講人数が多い。

2 つ目は本学への入学希望者を対象にする「大学説明」であり、文字通り、当該大学について説明を行う。多くの場合は対象が限られていることから、聴講人数は入試講演に比べるとかなり少ない。場合によっては他大学も同時に招かれていることが多く、生徒が幾度か説明を聞くことができるよう、同じ内容で複数回の説明をするよう求め

られることが少なくない。私立大学からは事務職員が派遣されることも多い。

3 つ目は専門分野に関する「出前（模擬）講義」であり、教員が自分の専門分野について分かりやすく話をするのが求められる。文学系、経済学系、外国語学系、理学系、工学系、薬学系といったように分野を分けることが一般的である。大学説明の場合と類似して、他分野の教員も同時に招かれていることが多く、高校生が専門分野の講義を何度か聞くことができるよう、複数回にわたって同じ話を話すよう求められることも多い。こうした出前（模擬）講義へは、学部所属の教員が出向くことがあれば、アドミッション部門の教員が自身の専門分野を講義するため出向くこともある。私立大学の場合、こうした模擬講義に事務職員を派遣する場合も見られる。そのため、高校からの依頼文書に「派遣いただくのは、実際に大学で講義をしている方に限らせていただきます。」といった文言が入っていることもある。

名称は様々であるが、同じ高校から入試講演、大学説明、出前（模擬）講義と、1 年間に複数回の依頼を受けることも少なくない。

こうした依頼は、高校から直接届くこともあれば、仲介業者を通して届くこともある。こうした仲介業者は、一般的に高校から報酬を受けとらないことが多い。ただし、対象となる高校によっては、報酬を要求することもあるようだ。複数の業者に聞いた話によると、無料で運営を引き受ける理由の一つは、生徒に住所を書かせ、個人情報を取得するためだそうである。その他の理由は、高校との連携を強めるとともに、広告宣伝費を支払う専門学校に対して、学校説明を行う機会を高校で設けるためとのことであった。

2.1 直接対話の機会（入試講演）

私が入試講演，大学説明，出前（模擬）講義のなかで，特に重視しているのが，入試講演である。その理由は，聴講人数が多いため，大学のイメージアップを図るうえで効果的だからである。ただし，問題はこうした講演は高校から依頼がなければ，行うことはできないことにある。そのため，高校から依頼が来るような講演内容にする必要がある。私は富山大学の宣伝というより，大学に進学することのメリットを強調した内容で講演を行っている。

具体的には，人的資本仮説を提唱したベッカー教授，シグナリング仮説を提唱したスペンス教授を紹介し，大学に進学することの重要性を将来の収入の観点から訴えている。教育経済学の分野では，教育は人間の質を高める社会的装置であると捉える人的資本仮説，そして個人の能力は教育を受ける前から決まっているため，自分の能力をアピールするために教育を受けると捉えるスクリーニング（シグナリング）仮説を中心に研究が進められてきている。

人的資本仮説を提唱したベッカー（1964）は，教育の効能は人的資本を蓄積することだと説明している。つまり教育によって知識や技術を獲得することによって労働生産性が高まり，ひいては賃金が上昇することを指摘している。

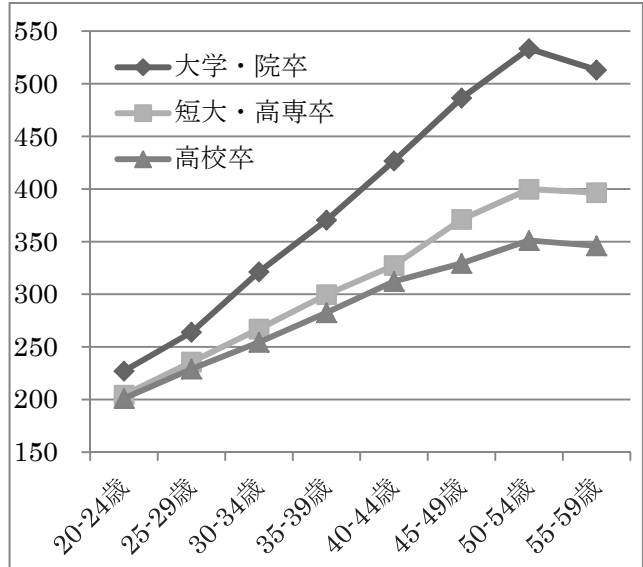
シグナリング仮説を提唱したスペンス（1973）は，世の中には生産性の高い人と低い人がいるが，生まれつきの能力も関係しているため教育による生産性の向上に限界があること，さらに企業にとって個人の生産性の高さを採用前に知ることが困難であるため，求職者は自身の生産性の高さを企業に知らせる必要があり，その際に最も効果的な手段が自身の受けた教育であるとした。つまりスペンスは教育が必ずしも個人の能力を向上させる訳ではなく，優秀な人材は自身の生産性の高さを企業にアピールするために難易度の高い大学に入ると説明している。

こうした研究を踏まえたうえで，大学進学の特典のひとつとされる賃金の伸びを知らせるため，大学・院卒者，高専・短大卒者，高卒者について年齢階層別に月額賃金を比較したデータを示すことにしている。生徒は大学に行ったほうが有利だと言われてでも，具体的な金額を聞かされなければ，自分の問題として身近に捉えることができない場合が多いと思われるためである。

実際にグラフを示して説明をすると，大学に進学するメリットが賃金の観点で理解できるようである。

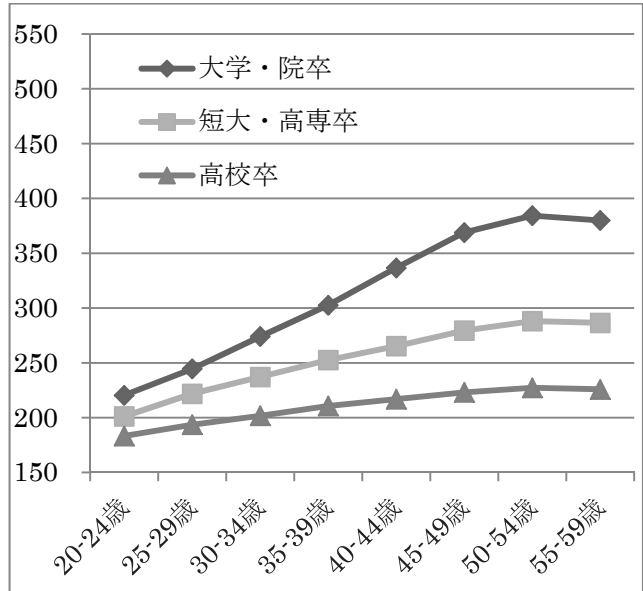
表 1 は厚生労働省の賃金構造基本統計調査（平成 29 年度）をもとに，男性の平均賃金（月額）を年齢階層別にグラフ化したものであり，表 2 は同様に女性をグラフ化したものである。

表 1 学歴別の月額賃金（男性）



単位：千円

表 2 学歴別の月額賃金（女性）



単位：千円

これらの学歴別の賃金プロフィールを示すことのほうが，単に生徒に大学進学を勧めるより，インフォーマティブであると私は考えている。さらに，学歴間の賃金格差は年齢が高くなるほど拡大する傾向が見てとれるため，「将来を見据える」と

ということと、大学進学は非常にリンクしていることを伝えることができるのではないだろうか。

こうした大学進学した場合の賃金のメリットだけではなく、私は私立大学の指定校推薦ではなく、一般入試を目指すことの重要性を語ることが多い。

西村(2013)は学力試験を受けて入学した場合、平均年収が約470万円であったのに対し、学力試験がないAO入試や推薦入試で入学した場合、平均年収が約394万円であることを示している。そして国公立大学の学力試験での入学者が、一番収入が高く、私立大学の学力試験がないAO入試や推薦入試で入学者が一番低いことをアンケート調査から明らかにしている。

私は入試講演において、この研究を紹介し、高校でしっかりと勉強することの重要性について強調している。同時に、現在の国公立大学のAO入試や推薦入試は学力を問う入試が多いため、収入が低いとは限らないことを伝えている。

こうした内容は広く受け入れられた可能性が高く、毎年1万人ほどの生徒や父母を対象に入試講演を行ってきた。講演先も、北陸以外では、東京都、長野県、静岡県、愛知県、京都府、奈良県、兵庫県、大阪府など30校以上で行っている。そのうち、愛知県が毎年20校ほどを占めている。愛知県からの依頼が多いのは、本学の志願者・入学者のうち、愛知県出身者が3番目に多いこと、そして私が愛知県出身であるためと思われる。

私は受験雑誌やネットなどによる入試広報よりもむしろ高校教諭や生徒、そして父母との直接対話を重視してきた。

2.2 直接対話の機会（出前講義、大学説明、高校訪問）

私自身、経済学分野の出前（模擬）講義にも毎年、20回以上参加している。依頼のある分野が幅広いため、学部からも協力を得ているが、年々依頼が増えているのが実情である。その理由は、複数の高校教諭によれば、私大ではなく、できれば国公立大学から教員を呼びたいためだそうである。私は毎年、およそ1,000人を対象に経済学の出前（模擬）講義を行っている。

毎年、経済学部の専門科目の講義では、7～8人ほどが、高校時代に私の出前（模擬）講義を聞いたことがあると申し出てくれる。そしてその講義聴講をきっかけに、富山大学を目指すようになったという学生も、毎年少なくとも4～5人ほどはいる。ミクロな事象でマクロを論ずるのは無理があることは承知しているが、こうした経験から出前（模擬）講義は、志望大学の決定と無関係で

はないと考えている。

そして、大学の志望に最も結びつくと思われる大学説明には、私は毎年20回以上参加している。ただし、聴講人数はそれほど多くないため、全体でも400～600人程度である。できればこうした説明会を増やしたいと思うが、地元の高校では、すでに大学について知っているの、出前（模擬）講義への教員派遣依頼のほうはるかに多い。

高校訪問は、毎年、地元の富山県で数十校、その他は石川県、長野県、愛知県、岐阜県、静岡県などで行っている。北陸新幹線の開業前には、埼玉県、群馬県、東京都、神奈川県などの高校にも訪れた。大歓迎とまではいかなかったが、事前に予約したこともあり、どこの高校もきちんと話を聞いてくれた。なかには話が盛り上がり、高校教諭5人と4時間以上にわたって懇談した静岡県の高校もあった。ここは最後の訪問予定高校であったが、実際に志願者をおくってくれるようになった。そして複数の高校で、進路指導担当教諭と意気投合し、入試講演を依頼されることになった。なかには埼玉県の進路指導を担当する教諭が、本学を気に入り、自身の息子さんが、本学を受験するよう勧め、実際に前期も後期も受験されたケースもあった。私は受験の当日、父母の控室の様子を見に行くようにしているが、前期日程も後期日程も教諭を見かけたため、息子さんの受験に同行していることが分かった。この高校は昨年度、甲子園で優勝するなど、スポーツの強豪校でもある。

基本的には、入試講演や出前（模擬）講義、大学説明においては、交通費を受け取らないことにしている。ただ年度末に、出張予算が足りなくなったときは、交通費の負担をお願いしたこともあったが、快く交通費を捻出してくれるケースがほとんどであった。なかには高校ではなく、運営を委託された業者が、代わりに交通費を支払ってくれたケースもあった。

出前（模擬）講義、大学説明、高校訪問はすべて直接対話であることから、費用対効果を考えながらも、できる限り行ってきた。

3. 業者などが主催する直接対話の機会（合同入試説明会）

合同入試説明会とは、数十から数百の国公立大学が一堂に会して、ブースで個別に大学の説明を行うものである。入試課員など入試担当職員、アドミッション担当教員、学部にも所属する教員などが、相談に応じるのが一般的である。場合によっては、在学生を同行させる大学もある。

こういった合同入試説明会では、質問があるわ

けではなく、とりあえず話を聞いてみようという生徒も少なくないが、時には高校教諭も訪れる。そのため、私はそうした教諭に、入試講演や出前（模擬）講義を引き受けていることなどを紹介している。大学に対してどのように出前（模擬）講義を依頼したらいいのか分からないという高校も少なくないため、こうした申し出は歓迎されることが多い。出前（模擬）講義の運営を業者に委託している高校でも、その依頼先が、私立大学に偏っていることを好ましく思わない場合も少なくない。そのためこうした申し出は、歓迎されることがほとんどであった。

こうした出前（模擬）講義を行った後、多くの場合、経済学系の志望者だけではなく、他の生徒にも聞かせたいとのことで、入試講演への依頼につながったことが多かった。つまり、合同入試説明会→出前（模擬）講義→入試講演といった順番となった。

もちろんそれだけではなく、生徒に直接話をすることもアドミッション担当教員の大きな役割だと考えていることも、積極的な参加の理由である。私は経済学部だけでなく、人文学部や工学部でも専門科目を担当していることもあり、実際に教えている大学教員だからこそ、相談者に語れることもあると考えている。

石川県立大学の松野隆一前学長は、北陸地区に限らず、様々な場所で合同入試説明会に参加されていた。こうした説明会で頻繁にお会いするので親しくなり、種々の企画に加わっていただくようになり、これらは現在も続いている。

松野前学長は、石川県立大学がどういった大学であるのか、またどういった大学にしたいのかを相談者に語っておられたが、学長ということもあり、その内容に非常に説得力があった。

これに感銘を受け、学内で開かれる父母への説明会において、本学の学長に参加を依頼するようになった。そして毎年、父母と質疑応答を含めた意見交換の場としたが、学長に質問できるし、要望も言えると参加者には好評なようである。

平成 29 年度は諸事情から参加会場数が減少したが、合計 55 回の合同説明会に参加し、1,518 人と個別で面談した。参加を決めるにあたっては、過去の全体来場者数や、過去に参加した際につけた詳細な記録などを参考にしている。

4. 質を落とさず受験生の選択肢を増やす入試改革（地方試験会場の設置と入試科目・配点の変更）

入試広報に加え、幅広い受験生を集めることも重要である。そこで私は質を落とさず受験生の選

択肢を増やす入試改革を目指した。具体的には 2 つのを行った。

1 つは地方試験会場の設置、もう 1 つは入試の科目と配点、出題内容の変更である。地方にある富山大学が、大都市を地方と呼ぶのはいかかなものかと思われるかもしれないが、ここでは本学試験会場以外を地方試験会場と呼ばせていただきたい。

地方試験会場の設置に際しては、構成員ではないものの、学部教授会に出席し、設置を提案した。経済学部では名古屋試験会場、工学部では関東試験会場を設置するよう提案した。後日、地方試験会場について、どこに会場を設置したらよいかについて、1対1で学長に説明を行った。

経済学部教授会では、当初は単なる入試状況の報告を行っていただけであった。その際に名古屋試験会場の設置の利点について説明したところ、学部長がその場で教授会の議題にするよう提案し、当日中に教授会で設置が承認されることになった。

工学部教授会では、私が提案する以前から、関東試験会場の設置が非公式に検討されていたようで、設置の必要性について私が説明を行うという形となった。この提案も当日中に承認された。後日、この決定についてマスコミを招いて発表を行った際には、地元だけでなく全国ネットのテレビ局、新聞が取材に訪れ、このことを北陸新幹線の開通とあわせて報道してくれた。

地方試験会場の初年度の志願者数は予想通りであったが、2年目には、定員を上回る受験生が集まり、収容しきれなくなった。こうした本学試験会場以外での受験生は全体の 1 割強に過ぎないが、地元では富山大学に都市部から多くの受験生が集まっているとテレビや新聞で何度も報道された。そのためもあってか、地元からの志願者も増加した。

アドミッションポリシーに合わないと思われる試験科目や配点が課されていた学科には、変更を促した。その結果、志願倍率が 40 倍を越える学科も複数現れた。詳細は、船橋（2017）「北陸新幹線開通に向けた入試広報の取り組み」を参照いただければ幸甚である。

続いて前期日程において、センター試験の配点が高い方式と 2 次試験の配点が高い方式の 2 つに分割するよう提案した。この提案は、理学部の一部学科が導入し、その後、工学部がすべての学科で導入してくれた。

工学部の場合、現在の学科編成と同じ過去 9 年間の志願者数の平均が 799.3 人（志願倍率 3.2 倍）であったのに対し、この方式を導入した平成 29

年度は1,636人(同6.4倍)と2倍以上になった。さらに、センター試験の得点率、そして2次試験の得点率がともに上昇した学科も多い。

2次試験の配点を高くした場合、1問あたりの配点が大きくなってしまいうため、問題数を増やし、1問あたりの配点を下げるよう同時に提案した。

なお、今年から前期日程において、同様の分割方式を導入した国立大学では、前年の約3倍の志願者が集まった。こうした取り組みは、以下の志願者数にも表れていると思われる。

表3は平成30年度入試における一般入試での志願者数のランキングである。

表3 一般入試の志願者数(国公立大学)

| 順位 | 大学名 | 志願者数 |
|-----|--------|--------|
| 1位 | 千葉 | 10,756 |
| 2位 | 神戸 | 9,980 |
| 3位 | 北海道 | 9,849 |
| 4位 | 東京 | 9,675 |
| 5位 | 富山 | 8,478 |
| 6位 | 大阪府立 | 8,470 |
| 7位 | 首都大学東京 | 8,254 |
| 8位 | 京都 | 8,233 |
| 9位 | 横浜国立 | 8,193 |
| 10位 | 大阪 | 7,867 |

単位(人)

東京大をはじめとする旧帝大などは、後期日程を行わない。そのため、志願者数そのまま大学の人気を表すわけではない。また中期日程での募集を行う大学は、後期日程と併願ができるため、志願者が多く集まる傾向がある。

このトップ10のなかで、富山大学以外は、すべて大都市圏の大学である。かつての富山大学に限らず、定員割れを危惧する地方国立大学は少なくないと思われる。実際、富山大学もかつては定員割れを本気で心配していた学科もあった。これは大都市圏の国立大学と大きく異なる点であるが、入試広報に力を入れ、試験科目や配点で工夫を凝らせば、地方国立大学であってでも、多くの志願者を集め、かつ偏差値をあげることができる可能性を示している。質を落とさず受験生の選択肢を増やす入試改革は、決して実施困難なことではない。

5. メディアのニーズに敏感になることによるメディア利用効果の向上(マスコミへの情報提供)

マスコミに対して、アドミッションセンターから常に情報提供を行っている。メディアのニーズ

に敏感になることによるメディア利用効果の向上が学生募集に有効だと考えるためである。

全国紙や新聞社のネット配信記事に、富山大学の志願者増加の理由が掲載された際は、私立大学の学部長をはじめ、複数の大学から話を聞きたいと連絡を受けた。

地方在住の生徒は、都市部の大学に魅力を感じている場合が少なくない。その際、いくら地元の国立大学を勧めても、関心を持たせることは困難である。しかし、学内で開催する説明会に、遠方から説明を聞くため訪れていることを知ると、大学への見方が変わる場合が少なくない。地元の生徒が、高校教諭に言われて仕方なく富山大学の説明会に来たが、遠方の生徒に会い、そんな遠方からも入学したいと思うような大学だったのか、と驚いたという話を幾度も聞いた。

かつて富山大学では、受験雑誌や新聞に広告費として毎年、数百万円を支出していたが、私はこれらすべてを取りやめることにした。ただし、数十万円の予算で長野市のバスの車体に小さな広告を出したりしたが、これはこの広告を長野市の住人に見せるというよりも、マスコミで放送されることを狙ったものであった。事実、全国紙をはじめ、テレビでも多数報道された。バスの車体広告は、富山大学でおそらく初めてだったことと、そして北陸新幹線の開通に向けて生徒の募集活動が熱を帯びているという、マスコミが報道したい趣旨に合致していたからである。このバス車体広告は、テレビ、雑誌、新聞などで取り上げられたので、価格以上の価値はあったと判断している。

このようにメディアのニーズに敏感になることによって、メディアの利用効果を向上させることに力を注いできた。

6. まとめ

入試広報をはじめとする宣伝媒体が、紙からWebへと移り変わってきているのは周知の通りである。ただし、地方国立大学の場合、生徒から関心を持ってもらえなければ、Webを見てもらうことはできない。また近隣の受験生だけでは、志願倍率を維持することはできず、相応しい学力も担保できないのも事実である。こうした点は、地方国立大学が、旧帝大や都心部の大学と比べて、学生募集において異なる点である。地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)によって、地方国立大学では地元学生の割合などを高めようとするところが増えている。しかし、都心部の受験生が入学しなくなれば、入学者の学力レベルは大幅に下がることに疑いの余地はない。た

とえ定員は満たせたとしても、これまで同様のレベルまで教育することは困難になることは想像に難くない。

志願者を増やし、入学者の学力レベルを上げるために特に力を入れたのが、高校教諭や生徒との直接対話、そして質を落とさず受験生の選択肢を増やす入試改革、メディアのニーズに敏感になることによるメディア利用効果の向上であった。

こうした取り組みによる成果は、執行部や学部にも所属する教員の理解と協力があってこそだが、アドミッションセンターとしては、学生の募集に一定の貢献をすることができたと思われる。

他大学においても、メディアのニーズに敏感になることにより、学生募集活動に正の効果をもたらすことは想像に難くない。

また、富山大学では、入試科目や配点の変更により、志願者数が増加したり、これまでとは異なる多くの受験生を全国から集めることができた。この事例から、他大学においてでも、同様の効果が見られる可能性を示唆している。実際に、入試改革について相談を受け、入試科目や配点の変更を行った国立大学では、過去の3倍の志願者が集まったとの報告を受けた。もちろん入学生のその後については、詳細な分析が必要であることから、その結果を待ちたい。

同じ国立大学でも、その立ち位置、求める学生像によって、やり方はすべて異なる。私は国立大学の立ち位置によって、どのように入試科目や配点を変更すべきなのか、考えを有している。そこで、富山大学で行った入試改革が、すべての国立大学にそのまま当てはまる訳ではないことに注意が必要である。ただし、今回の入試科目や配点の変更で得られた知見については、今後とも明らかにしていきたい。

参考文献

- 厚生労働省『平成 29 年度賃金構造基本統計調査』
 西村和雄 (2014) 「学習科目選択と大学卒業後の所得」『数学通信』18(4), 39-43
 船橋伸一 (2017) 「北陸新幹線開通に向けた入試広報の取り組み」『大学入試研究ジャーナル』No.27, 143-148
 船橋伸一 (2007) 「学歴が賃金に及ぼす影響の実証分析」『経済科学』No.55 (1), 67-84
 Becker, G., (1964) "*Human capital: a theoretical and empirical analysis, with special reference to education,*" Columbia University Press.
 Spence, M., (1974) "*Market signaling,*" Harvard University Press.